



私の研究

方言の研究

— 地域のことばを学問する —

玉懸 元 (たまかけ げん)

いわき明星大学 教養学部
教授



1. 私の研究分野：日本語学とは

日本語学という学問があります。初めて学ぶ学生に「日本語学ってどんな学問だと思う？」と聞くと、だいたい「日本語の正しい使い方を学ぶものではないか」という答えが返ってきます。けれども、日本語学は「正しい日本語」ばかりに関心を持つわけではありません。では、日本語学が関心を持つのは、どのようなものなのでしょうか。

いくつか例文を挙げます。

- (1) 大変素敵なお嬢さんでいらっしやいます。
- (2) あれあめんこい娘だごだあ。
- (3) あの子マジチョーイケてるんだけど！
- (4) すぐれてときめき給ふありけり。

(1)は現代日本語のいわゆる標準語、(2)は方言、(3)は若者ことば、(4)は平安時代のことばです。これらは、すべて日本語です。「正しい日本語」と言うのか分からないものも含まれていますけれども、いずれも日本語の一つの姿であることは間違いありません。

日本語学は、すべての日本語に関心を持ちます。したがって、標準語も方言も若者ことばも平安時代のことばも（その他も）、すべて等しく日本語学の研究対象になるのです。

この日本語学という学問を私は専門にしていま

す。なかでも現代日本語の方言研究を行っています。

2. 方言研究の対象

方言研究と一口に言っても、その対象はいろいろです。たとえば、次のようなことが方言研究の対象になります。

- (5) ある地域で「とんぼ」のことを「あけず」と言う。
- (6) ある地域で「知事」のことも「地図」のことも「つんず」と言う。
- (7) ある地域で「雨」はアを高く言い、一方「飴」はメを高く言う。
- (8) ある地域で「勉強しない」と言うとき「勉強しん」と言う。

以上のうち、(5)は語彙研究の対象、(6)は発音研究の対象、(7)はアクセント研究の対象、(8)は文法研究の対象です。方言と言うと、語彙のことを思い浮かべる人が多いようです。けれども、方言研究は、語彙ばかりではなく発音・アクセント・文法等も対象にします。

ところで「方言の文法」と言うと、しばしば「方言に文法があるんですか？」と驚かれます。しかし、方言にも文法があり（と言うよりも、文

法のない言語はありません)、研究対象になります。

かつて動詞の活用について方言調査を行ったことがあります。具体的に言うと、動詞「する」の否定形に関する調査で、たとえば「勉強する」を打ち消して「勉強しない」と言うときどのように言うかを調査したのです。愛知県・岐阜県の若者(20歳前後)に対して行った調査の結果では、「勉強しん」が多数派でした(玉懸元2012)。

標準語で動詞「する」は、「しない」「すれば」「しろ」「しよう」等の語形に変化することができますけれども、「しん」という語形には、なれません。言い換えると、標準語は、動詞「する」が「しん」という語形に変化することを許しません。それが標準語の文法(ことばを組み立てる際のルール)なのです。

ところが、愛知・岐阜の方言では、動詞「する」を「しん」という語形に変化させることができます。その語形変化を許すのが愛知・岐阜の方言文法なのです。

各地の方言は、しばしば独自の文法を作り上げ

ます。方言研究では、文法も重要な研究対象になるのです。

3. 福島県の方言はアクセントが特徴的

福島県の方言で特徴的なのは、何と言ってもアクセントです。日本語の方言アクセントには、いくつかの種類がありますがけれども、三大勢力を挙げれば次のようになります。

- ① 東京式アクセント
- ② 京阪式アクセント
- ③ 無型アクセント

それぞれがどんなふう分布するかを地図として示したのが図1で、これは服部四郎・金田一春彦・平山輝男をはじめとする先学の研究成果です。

この図を見ると、①の東京式アクセント方言が東日本にも西日本にも広く分布し、大きな勢力であることが分かります。また、②の京阪式アクセント方言(いわゆる関西弁のグループ)が近畿地方を中心として四国・北陸方面にも延び、これも大きな勢力をなしています。もう一つの大きな勢力が③の無型アクセント方言で、宮崎・熊本・佐

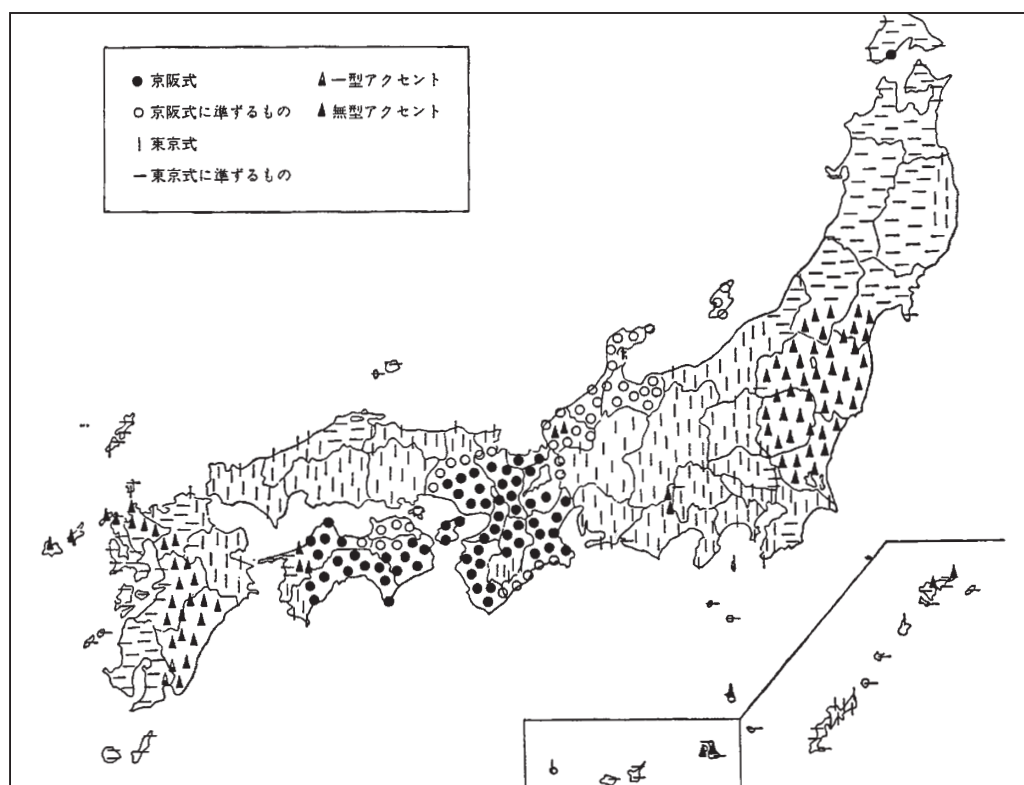


図1 アクセント分布図 飛田良文ほか編(2007)『日本語学研究事典』明治書院より

賀・長崎の各県にまたがる地域と南東北～北関東の地域にまとまって分布します。

さて、福島県はほとんど全域が無型アクセント方言地帯にすっぽり収まっています。「福島県の方言イコール無型アクセント方言」と言ってしまうと、ほぼ間違いありません（檜枝岐村の方言だけが東京式アクセントに準じます）。福島県方言の特徴は、とりわけ、そのアクセントの面にあると言ってよいと思います。

と言っても、現在の福島県の若者たちはどうでしょうか。昨今、全国の若者が方言をあまり使わなくなっていることが指摘されています。とすると、もはや福島県の若者たちも伝統的に受け継がれてきた無型アクセントを失って、その他のアクセントで話しはじめているのでしょうか。

この問題は、現在、私が興味を持っていることの一つです。私の暮らす福島県いわき市の若者たちのことばを聞いている限り、どうやら無型アクセントはまだまだ健在のようではあります。福島県の若者におけるアクセントの実態を明らかにすべく、調査計画を練っているところです。

ところで、私の授業への感想として、次のようなことを書いて寄せてくれた女子学生がいました。

(9) 私は生まれも育ちもいわき市です。アルバイトで接客の仕事をしています。東京の方から来たお客さんに「なまっているね」と言われますが、自分では東京のことばと何が違うのか分かりません。

「なまっているね」という東京方面の人のことばは、この学生の話す無型アクセント方言を指摘したものでしょう。そして、この感想からは、いわき市の若者が無意識に方言を話している様子がかげえまます。この辺の意識のあり方も、多数人への聞き取り調査を行って明らかにしたいと考えています。

なお、後日、この女子学生には「あなたは“なまっている”ではありません。地元のことばを正しく受け継いでいるのです」とコメントしました。本来「なまっている」かどうかは相対的な問題なのに、無型アクセント方言を「なまっている」と評する東京式アクセント方言人は一方的です。

4. 方言で地域を元気に

かつて方言は「恥ずかしいもの」とされてきました。1960年代の新聞を繰ると、次のような見出しに出会います。（田中ゆかり2013）

(10) 「少年工員が同僚殺す 集団就職 方言笑われ、不仲」1964年5月13日、毎日新聞

(11) 「方言をからかわれ、兄の婚約者絞殺 カツとなった予備校生」1965年8月27日、読売新聞

当時は集団就職の時代です。地方の多くの若者たちが義務教育を終えた後、就職のために集団で首都圏に移り住んでいきました。

現代と違って当時の地方の若者たちは基本的に地元の方言しか話せません。その若者たちが首都圏へ出て自身の方言で話すと、田舎者だと嘲笑されてしまったのでした。地方の若者たちは自らの方言を恥ずかしがり、劣等感（柴田武1958らの言う「方言コンプレックス」）を抱くようになります。それは、まさしくことばを奪われたに等しい苦しみであったことでしょう。(10)(11)のような痛ましい事件の背後には、そうした地方出の若者の苦悩が横たわっています。

しかし、今や時代は変わりました。企業が方言を使ってCMを打つことも珍しくありません。たとえば、2010年頃、芸能人の森三中さんと仲里依紗さんを起用し、津軽弁をフィーチャーしたトヨタ車のテレビCMが流れました。津軽弁の響きがフランス語に似て聞こえることを実に上手く利用したCMで、その着眼には感心するばかりでした。

また、各地域が地元の方言を活用した街興し（地域の活性化）に励んでいます。これも、方言が「恥ずかしいもの」とされていた時代には、考えられなかったことでしょう。

図2は、高知県高知市の「ひろめ市場」で撮影した一枚です。高知市の街中では、地元の方言（すなわち土佐弁）が使われたポスターや看板をたくさん見かけます。高知の人々はビール好きで知られ、特にキリンビールを好む人が多いそうですけれども、そのキリンビールの広告におけるキャッチコピーも土佐弁で書かれていて「たっすいがは、いかん！」です。

意味を土佐弁ネイティブに尋ねると、面白いことに意見が分かれます。「薄い味の（＝たっすい）ビールは駄目だ」と言う意味だ」と言う人もいれば「他のビールや何かを引き合いに出しているわけではなく、とにかく“弱々しい（＝たっすい）のは駄目だ、だから元気を出そう”という意味だ」と言う人もいます。

ネイティブでないと意味が分からないばかりか、ネイティブでも解釈が分かれる方言を広告のキャッチコピーに使うのは大胆とも思えます。けれども、そこに土佐弁への誇りや土佐弁を楽しむ遊び心が感じられないでしょうか。

なお、図2に見える「うちのタタキは高知で一番おいしいと勝手に思うちゅう」は、ネイティブによれば、観光客にも理解できるようだいぶんマイルドな土佐弁にアレンジしてあるそうです。ここで言う「タタキ」は、もちろんカツオのタタキです。

高知市の街中は、土佐弁で書かれた看板が立ち、ポスターが貼られ、人々の話す土佐弁が飛び交い、いつ訪れても賑わっています。市の人口は33万人くらいですから、私の住むいわき市とあまり変わりません。しかし、その活気にはずいぶん違いを感じます。高知市の活性化に土佐弁が果たしている役割は小さくないと私は睨んでいます。

いわき市も、地元の方言を活用することでもっと元気な地域にしていけないものだろうか。いわき市を、福島県を、地元の方言で満ちあふれる、いっそう活気ある地域にしていけないものだろう

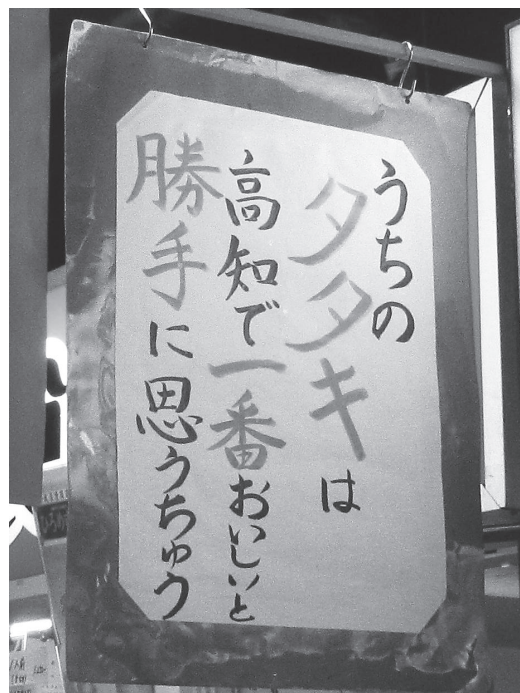


図2 高知市ひろめ市場内の店舗「やいろ亭」にて 2017年1月

か。方言研究の成果を活かしてそのお手伝いができたら—そんなことを思い描きながら、方言の研究を続けています。

文献

1. 柴田 武 (1958) 『日本の方言』 岩波書店
2. 田中ゆかり (2013) 「方言」から見える日本の社会」木部暢子ほか『方言学入門』三省堂
3. 玉懸 元 (2012) 「名古屋市を中心とする言語地図—休み時間、模造紙、すのこ、カ変仮定形、サ変否定形—」『中京国文学』 31

<プロフィール>

1974年生まれ。東北大学文学部卒業、東北大学大学院文学研究科修了。韓国カトリック大学校客員教授、中京大学准教授などを経て、2016年度いわき明星大学に着任。

主な研究業績

- ・「格助詞相当形式『ンドゴ』」、東北大学方言研究センター／編『東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究』文化庁委託事業報告書、2012年
- ・「形式名詞とは何か—山田孝雄の『日本文法論』に立ち戻って—」、『中京大学文学部紀要』第49巻2号、2015年
- ・「宮城県白石市方言の感動・希求表現『〜ゴダ』—『今日暑いゴダ。冷たいもの飲みたいゴダ』—」、『国語学研究』第56集、2017年